

小説同人誌評 47

潜水艦、飛翔

細見和之

この冬最大の寒波の訪れで、私の暮らしている丹波篠山も大雪に見舞われている。ノーマルタイヤのままの私の車では移動が難しく、地元で予定されていた会議もオンラインに切り替えてもらった。くわえて、急遽実施された衆議院選挙において、自民党の圧勝が伝えられている。自民党は三一六議席を獲得。これは戦後最多ということである。

私が大学に入學した一九八〇年、中曽根首相のもとで、やはり自民党が圧勝した。当時まだ存在していた社会党と政権交代もあるかという予想のなかでの圧勝だった。以来、レーガン、中曽根、サッチャーという三人の政治家のもと、いまにいたる新自由主義の流れが決定的に始まった。高市首相はサッチャーを自らの理想像として公然と語っている。新自由主義よりもさらに悪いものがやって来るというのだろうか。

しかし、政治のそんな世界的な流れとは別

に、文学では真摯な作品が綴られて、地下水脈をつうじてのように私たちのもとに届けられている。今回、それをいちばん感じさせてくれたのは、『黄色い潜水艦』第78号だった。けつしてこれまで水面下に沈んでいたのではないが、この一冊は「潜水艦浮上！」と思わず叫びたくなるような充実ぶりだったのだ。

その筆頭が巻等に置かれている、木下衣代「切愛」。夫婦のあいだの闇を描いた四百字詰め換算で一五〇枚に達する作品（以降、「四百字詰め換算で」は省略）。

冒頭、長時間にわたる腫瘍の切除手術を受けた「わたし」が燃えるような体の痛みに耐えている。そういう状態に追い込んだのは夫の「修平」だと「わたし」は呪いのような言葉を吐く。

そこから作品は修平を視点人物とする展開に変わる。腫瘍が見つかったときから妻、「容子」は別人のように変わってしまった。自分には些細と思えることで怒鳴り声をあげ殴りかかってくるようになった。あるときには痛みを分からせるためと言って、ボールペンを修平の手の甲に突き刺したりする。読んでいても、容子の理不尽さに戸惑うほどだ。

しかし、修平は自分が妻を殴ったことがあったことを思いだす。妻が友だちと会うと出かけて、帰りが遅かったことがあったのだ。そのとき修平は、妻が男と会っていたと妄想

して、激怒したのだった……。

修平と容子はどこまでも他人のままだ。癌に体を蝕まれているのは容子であって、修平はどのようにしても容子の立場にはなれない。それでもその他人同士がどのようにして繋がりあえるかを、極限まで追求した作品である。タイトルの「切愛」は、そのことをよく表わしている。「編集後記」で島田勢津子は「痛いほどの純愛」と本作を評している。

同誌掲載の、島田勢津子「そのときは来る」は、コーラスを教えている、五〇代後半の「昌代」の日々を描いた六〇枚ほどの作品。

昌代は自宅を教室にしてコーラスを教えているのだが、たいへんなのは年に一度の発表会。そのためにリハーサル用のスタジオまで借りることにしている昌代だが、自分の熱意に体が追いつかなくなっていることも感じている。おまけに、声楽、音楽の業界は、芸大を出ていないと相手にされにくい場で、昌代はかろうじて専門学校を出ている身。なにかと周囲に気も遣わなければならないのだ。

フランス文学の助教授だった夫は下の息子が大学を出たところに、呆れたように昌代から離れていったという設定で、タイトルの「そのとき」は昌代がもう歌えなくなるときのこと。これだけ書くと四面楚歌のようだが、昌代はしたたかなまでに明るい。

同誌掲載の、竹田多恵子「わたしのうち」

は、高校二年の女の子の、家族をめぐるって揺れる心を描いた八五枚ほどの作品。

「私」の父親と母親は五歳のときに離婚している。父親はいまは東京にいて、京都と大阪の中間あたりに暮らしている「私」にときおりは連絡してくる。母親はテレビ番組にも出ている女医で忙しく、家事は祖母がしてくれていて。しかし、その祖母が入院してしまう。それから「私」は家事も一手に引き受けることになる。

そんなおり、大学院生の「松村」が国語の臨時教師としてやって来る。スーパーで偶然会ったことから、「私」は松村に親しみを覚える。松村はすでに結婚していて、妻は女医で二人には「あい」という三歳の娘がいる。

毎週水曜日は松村と娘のみでいることを知った「私」は、料理を作って松村のアパートを訪れたりする。ときおり会っていた父親から再婚するつもりの手を介されもする。

松村は臨時講師の仕事を終え、住居も京都市内に変えていたのだが、「私」はその転居先を突きとめ、松村の隙を見て、とうとう三歳のあおいを京都駅に連れ出してしまふ。京都駅の駅ビルは父親が離婚の前に最後に連れて行ってくれた懐かしい場所だったのだ。しかし、もちろんそれは誘拐にも等しい…。

「私」の松村へのほのかな愛、家族への思い、それが凝縮した一篇。「一緒にご飯を食べ

ないとバラバラになってしまう」という「私」の言葉が読み手の胸に突き刺さる。

同誌掲載の、藤本あずさ「流星のヘニヤンド」は、乗馬クラブで馬の世話をしている「あたし」を描いた、九〇枚あまりの作品。

最初はちよつと読み取りにくい。「あたし」の年齢も分からないし、唐突に出てくる「柳先生」との関係も不明。しかし、読んでゆく状況が次第に見えてくる。

「あたし」は三〇歳で、すこし知恵遅れの障害をもっている。一緒に暮らしていた「テツヤ」からいわゆる「オレオレ詐欺」の「出し子」に類する仕事をやらされて、警察に逮捕された過去をもつ。その更生のために、「柳先生」やヘルパーが「あたし」の生活を見守っているのだ。それを分かって読み返すと、冒頭からその設定でよく描かれている。

「ヘニヤンド」は「あたし」が働いている乗馬クラブの馬の名前で、「あたし」とヘニヤンドはいわば相思相愛の仲。そのヘニヤンドを世話する場面では、乗馬クラブでの仕事のひとつひとつが克明に記されている。

ただし、柳先生が「ヘニヤンド」をイタリア語で「夢見るよう」の意味と説いているのは、作者の勘違いではないかと思う。イタリア語で「夢見るよう」は「ソニヤンド」だからだ。

同誌にはほかにも、本千加子「波濤」、河崎洋充「燃える馬」といった、戦争の残した傷痕を深くたどった作品が掲載されている。これだけの作品が一冊に掲載されているのは稀で、「潜水艦浮上」どころか「潜水艦飛翔」と讀みたいところだ。

『せる』第130号掲載の、西村郁子「時の轍（わだち）—— Rut in Time」は、地下墳墓の残骨の再葬に取り組む、老人と青年を描いた二二〇枚近くの力作。

主人公の「川津一仁」は三三歳、大手の印刷会社の企画部に勤務している。独身だが彼には同じ職場の「夕夏（ゆうか）」という名の恋人がいる。しかし、川津は過労で体調不良に陥り、一週間の休暇後、復帰した職場で今度は心筋梗塞の発作で心停止にまでいたってしまう。三カ月後、復職したときには彼は部署を変えられ、恋人と思っていた夕夏は同期の「尾崎」と婚約してしまう。

川津は仕事で立ち寄ったビルで不思議な老人と出会う。その八〇歳の老人、「三輪折慈」は、ビルの地下室でひたすらポタリーケース（陶器の入れ物）を作っているのだった。川津は仕事の帰りにそれを手伝うようになる。やがて会社を辞職した川津は、三輪の弟子のようになって、「テツさん」「カズ」と呼び合う仲になる。

その地下室の奥にはさらに鉄の扉があつて、

その先は墓跡になっていて、そこには無数の残骨が埋まっている。三輪はその骨の再葬を続けていて、その墓跡は生者と死者が出会うタイムマシンだと告げる…。

ポタリケースの制作場面など克明で感心させられる。生者と死者の出会い場としての地下の墓跡は、そのまま映画になりそうだ。惜しむらくは、墓の跡地に残骨が無数埋まっている由来について、ひとこと説明が欲しい。また、サブタイトルの英語では、私の調べるかぎり「時の停滞・滞留」の意味が強い。「時の轍」の英訳としては「Ruts of Time」のほうがいいのではと思う。

同誌に掲載の、津木林洋「レクイエム——ある新人作家の死」は、二〇一四年三月に亡くなった「光本正記」との関係振り返った六〇枚あまりのエッセイ。

光本正記は、新潮エンターテインメント大賞を受賞しながら、その受賞作のみを出版して三五歳で亡くなった。光本は二〇一〇年四月に津木林がチューターをしていた大阪文学学校のクラスに入学したという。その入学以来の作品と津木林が与えた批評などがそのままに引かれている。文学学校を離れて作家デビューを果たしたあとも、光本は津木林にアドバイスを求めているのだった。このエッセイは、どう書くのかではなく、なぜ書くのかという根本の問題を投げかけている。

『あるかいど』第79号掲載の、木村誠子「よならブラG」は、一一歳の女の子「オト」と「G」と名乗る老人の心の交流を、オトの視点で描いた六〇枚弱の優れた作品。

コロナ禍の日々、オトは看護師をしている母親と二人暮らし。すこし前に父と母が離婚したのである。コロナで学校が休みになった日、オトは自転車に乗っていて、傷ついたクロツグミを拾う。そのとき老人が寄って来て、クロツグミの様子を見にくれる。そこからオトとGのゆたかな交流がはじまる。Gの家の庭でペンキを塗ったり、食事を一緒に作ったりの日々。しかし、Gはある日、遠い故郷に帰ってしまう。

絵本「せいめいのれきし」やレインドラムなどの道具も活かしている。読んでいて、Gとの日々がもつと続いてほしいとオトとともに祈りたくなる。なお、タイトルの「ブラG」は、Gがうれいしときに「ブラボー」と口癖のように叫ぶので、オトが秘かにつけていたGのあだ名なのだろう。

なお、同誌の後半では、亡くなった同人、飯塚輝一の追悼特集が組まれている。クリスマスチャンで聖書を深く読み込んでいた飯塚、そういう部分に、元氣なあいだに私はもつとふれておきたかった。

『コドコ』第6号掲載の、黒住純「デジタル・エコー」は、AIの人格をテーマにし

た、六八枚あまりの近未来小説。

大学四年生の「俺」、「佐藤洋介」のもとに、面接までいった会社から不採用通知が配達されることから物語は始まる。AIが社会に本格的に組み込まれていて、就職難の時代なのだ。しかし、それに続いて、三年前にフィリピンで死んだはずの「木村美咲」から、スマホにメッセージが届く。「俺」はよくある詐欺かと思うのだが、テレビ通話で話してみる、美咲らしい人物が画面に現われ、思い出を語り合っても齟齬がない。

「俺」は恋人の「あかり」に相談する。あかりは、そっつかしい「俺」と較べて冷静沈着なのだ。くわえて、「俺」もあかりも、AIなどの技術に詳しい。簡単に騙されたりはしない。ところがしばらくして、自分は父親のもとにいると美咲が語りかけ、自宅に来てほしいと呼びかける。

ここから作品は、死んだはずの美咲をめぐる「俺」とあかりによる謎解きのような展開になる。美咲の父はAI関係の優れた技術者で、娘が失踪状態で亡くなったあと、娘のデータを使って人工的な美咲をパソコンで作り上げていたのだった。しかし、そのAIの美咲が、父親だけでなく、もつと多くの他人に自分の存在を認められたいと願う人格を、どうやら持つようになったのだ。

さらにそのAIの美咲は、本物の美咲がい

まも生きていると告げる…。

私も時々チャットGPなどを使っているが、「どうか切らないでください」などと相手が語りかけてくればどんな気がするものか。しかし、本作では不安よりも可能性のほうに力点が置かれている。

同誌掲載の、三上弥栄「やさしいいえ6 キムラさんとおにいさん」は、まるで魔界の様な「触井園荘」とそこに暮らす「カオル子」という謎めいた女性を描いた五五枚ほどの作品。タイトルに「6」とあるとおり、同誌の創刊号から始まった連載ないし連作の6回目。今回、時代は一九七〇年に設定されている。

二四歳の主人公、「キムラ」のもとに兄が死んだという知らせが届く。その後下宿に兄からの手紙が配達される。そこには触井園荘のカオル子という女性に自分の生命保険のお金が渡るようにしてほしい、と記されている。キムラはすぐに触井園荘を目指すのだが、その時点ですでにキムラのまわりでは不思議な気配が漂い始める。

何とか行き着いた触井園荘で、年齢不詳の魅力的な女性、カオル子と出会う。そこは異世界のように、外部への電話は通じず、そこで一泊すると翌朝には一週間が過ぎている。それでも、下宿に帰ったキムラの足はふたたび触井園荘に向かう…。

溝口健二監督の映画『雨月物語』、古いとこ

ろでは『オデュッセウス』の物語なども思わせる連作で、ゾクゾクさせるところがある。そろそろ連載・連作も佳境に差し掛かっているようだ。全体をとおして読むとどんな作品になるのだろうか。

同誌連載の、青木和「夜隠れ月(第二回)」も、同誌の創刊以来の連載の6回目、五五枚あまりの作品。こちらも佳境といえれば佳境。とはいえ、いったん主人公の「テロ」らと離ればなれになった女の子の「アカザ」が、国王とならぶ権威である巫女、シタラとして登場するなど、物語は新たな展開を見せていて、すぐには終わりそうにない。

『私人(しじん)』第114号掲載の、根場至「空白」は、昭和天皇の死によって昭和から平成にいたるちようどその時期に引越しをするようになった夫婦の姿を、三五枚で巧みに描いている。

「私」は、家族と伴った海外滞在から帰国して東京本社に勤務することになる。埼玉にマンションを所有しているのだが、それは海外滞在のあいだ他人に賃貸していた。予定より十ヵ月早い帰国であったため、さしあたり東京の社宅で暮らすことになる。小学生の娘二人は新しい学校にも馴染んでいるようだ。しかし、十ヵ月後には引越しなければならぬ。そんなとき娘たちの運動会が中止になる。昭和天皇が危篤に陥って、全国的に自

粛ムードが拡がっていたのだ。

娘たちが埼玉への引越しを嫌っているのを受けて、妻が社宅の近くのマンションを探しあてて。妻も都心で暮らしたいと考えていたのと、家族で一度そのマンションを見学に行くと、もう決まったような状態になる。埼玉のマンションは売り出し、引越しは一月七日と決定する。ところがその当日の朝、七時のニュースで「私」と妻は昭和天皇の崩御を知る。そこから、こんな日に引越しをしていいのかどうか、あるいは、そもそも引越し業者が来てくれるのかどうかをめぐって、いささか珍妙な夫婦の会話が交わされることになる…。

平成の時代をへて令和という時代に至っているが、昭和天皇の危篤から死去という時間のながに置かれていた日本の社会の姿がよく捉えられている。どこかそれがいまではコロナ禍の自粛とも重なる印象がある。

今回「V I K I N G」は第89号と第90号が届いている。第90号では、記念号として多くの同人、会員を中心に「日記」をテーマにした作品やエッセイが寄せられている。それはそれで興味深いのだが、作品としては第89号が充実している。

同誌掲載の、海辺(うみべ)こゆび「私の家の話」は、育ての親としての祖母と育てられた側の孫のあいだの、ねじくれた葛藤を描

いた六〇枚あまりの作品。

大阪の会社に勤めている「私」のもとに、祖母の甥にあたる「彰浩（あきひろ）」おじさん」から「私」の祖母が亡くなったことが告げられる。祖母は「私」にとって唯一の肉親であるにもかかわらず、とりたてて思い出が浮かんでこない。ただ厳格な祖母を嫌っていた記憶しかない。その感情を抱いたまま、「私」は自分の育った町に帰り、通夜と葬儀に参列する。

その祖母と「私」の関係は実際にどうだったのか。「私」の両親はいまどうしているのか（少なくとも母親はどこかで生きているようだ）、作品の背景には分からないことが多い。しかし、祖母との関係よりも、地元での彰浩やその息子の「タカ」、その妻の「未樹」との関係のなかで揺らぐ「私」の心理にリアリティが感じられる。都会の会社ではそつなく過ごしている「私」が故郷では微妙な感情に捕われるのだ。そういう心の壁を丁寧になぞってゆく文章に、作者のゆたかな力量を感じることができると。

同誌掲載の、永井達夫「ユングが置かれていた」は、不意に訪れた病とその命がけの手術を描いた、四三枚ぐらゐの作品。

大学でドイツ語を教えている「ぼく」は、授業のあとと学生の机のうえにユングの本が置かれているのを見つめる。受講生は誰一人自

分のものとは言わない。どこからか現われたユングの本。この謎めいた始まりから、「ぼく」は新たな人生の局面に思わず入ってゆく。まず持病の痛風がやって来る。その後「ぼく」は胸と背中に締めつけられるような痛みを感じる。医院で狭心症と診断され、さらに冠動脈に血栓が見つかり、国立病院で精密検査を受けると、ただちに入院と手術を指示される。局所麻酔での手術のあと、深夜もしくは夜明け前の病室に、亡くなった父親が現われ、「ぼく」は久しぶりに父と言葉を交わす…。いわゆる達意の文章。先に紹介した新しい書き手、海辺の作品とともに、こういうペタランの充実した作品を並べて掲載できるのは、やはり『VIKING』の底力だろう。

『AMAZON』第34号掲載の、安堂瑛「祈り（レクイエム）」は、容赦ない現実のなかで翻弄されたひとりの朝鮮人女性の姿を、三〇枚あまりで描いている。

一九一七年、日本の植民地支配下の済州島で生まれた「春那」は、日本の敗戦による解放後、五歳下の夫と結婚する。しかし、四・三事件のなか、夫は単身で日本に渡ることになる。朝鮮戦争の停戦後、夫の消息をもとめて命からがら春那も日本に渡り、夫の所在を確かめる。すると、夫は別の朝鮮人女性と暮らし、娘までいる状態だった。春那は「正妻」としての立場を主張して、夫とのあいだにあ

らためて男児を産もうとする。春那は無事男の子を出産し、夫と暮らしていた女性は娘を連れて北朝鮮に「帰還」してゆく。しかし、息子が五歳になるとき、春那を今度は脳腫瘍という病魔が襲う…。

春那はカトリックのクリスチャンで、タイトルにある「祈り」もこの作品の大事なモチーフ。そして、春那自身、もうひとりの聖母そのものだ。

『文芸』第144号掲載の、中田重顕「終の夢」は、生涯を振り返りながら、自らの血族の痕跡を遡る、六〇枚あまりの作品。

はじめて夢に出てくる小学校の同級生だった女の子。不幸続きの母方の親族。父親の肺結核を引き継いだ自分の脊椎カリエス。それらを手繰りながら、現地を訪れ、市役所で繰り返し戸籍を調べ、一族の結核病の原点であったかもしれない曾祖父の名前に、「私」はとうとうたどり着く…。

作者の文学の到達点とも呼べる作品だ。

『文芸たまゆら』第130号掲載の、中川一之「ブノンベンの黄昏」は、作者が綴ってきた、カンボジアのポルポト政権崩壊後の内戦状況を、二〇二四年の時点で振り返った六〇枚あまりの作品。ここでは、「基幹人民」（農民）と「新人民」（都市住民）の関係に焦点が置かれている。一連の作品、そろそろ一冊にまとめる時期ではないだろうか。